

研究開発課題別事後評価結果

1. 研究開発課題名：次世代メディアコンテンツ生態系技術の基盤構築と応用展開
2. 研究代表者：後藤 真孝（産業技術総合研究所 人間情報インタラクション研究部門 首席研究員）
プログラマネージャー：伊藤 博之（科学技術振興機構） 2020年10月まで
竹内 章平（科学技術振興機構）
3. 事後評価結果

本研究開発課題では、「音楽の中身を自動解析する技術（音楽理解技術）により、新たな価値を生み出し貢献する」というコンセプトで、音楽体験の未来を切り拓く研究開発に取り組み、従来の受動的な音楽をアートの世界から工学の領域に転換・拡張し、音楽のビジネスとしての可能性を格段に広げ、音楽の楽しみ方がより能動的で豊かになるように人々を支援できるサービスプラットフォームの構築を目指した研究開発を進めてきた。

その中で、大規模な音楽コンテンツ（音楽、音楽動画など）の分析・合成を可能にする技術を実現することで、鑑賞・創作・協創の三つの側面から人々を支援するための基盤技術を構築した。さらにその応用展開として、鑑賞支援・創作支援・協創支援などの様々なサービスを実現可能にする「音楽コンテンツ生態系のサービスプラットフォーム」も構築した。

これらを通じて、学術・産業・社会・文化など様々な分野に貢献し得る成果を創出し、次世代のメディアコンテンツ産業の発展にも貢献してきた。そのプロセスとして、基礎から応用まで幅広い研究成果を創出し、学術論文として発表するだけでなく、研究の進捗と社会実証を繰り返し軌道修正しながら、視聴者やクリエイターなどが利用できるWebサービス群を開発して公開したことは、高く評価できる。Webサービスとして一般公開した成果は、大規模音楽連動制御プラットフォーム「Songle Sync」、リリックビデオ（歌詞アニメーション）制作支援サービス「TextAlive」、音楽発掘サービス「Kiite」、歌詞探索ツール「Lyric Jumper」などがある。

さらに、社会実装に向けてライブコンサートやイベントなどをプログラマネージャーが主体となった実証実験や企業連携により実施したことは特筆すべき成果である。知財戦略に基づいた特許出願および開発キット（API）の提供によるビジネスモデルを構築したことなどについても高く評価できる。

以上のことから、非常に優れた成果が得られたと評価できる。

今後は、開発キット（API）の強化に加え、ベンチャー設立によって国内外の研究者や産業界などとの連携によるネットワーク形成がさらに強固に進められることにより、進化したサービスを国内外に継続的に提供することを目指したACCELの成果の社会実装が期待できる。

以上